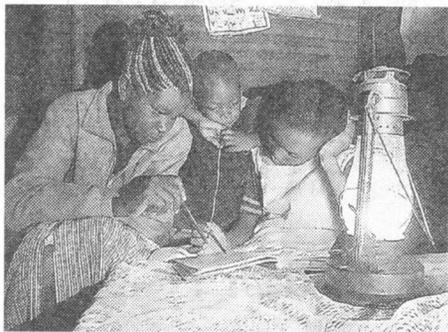


アフリカと私たち

ムービー 世界有数「ノリウッド」



貧困、飢餓、紛争、大自然……。今春公開の映画「チョコラ！」はアフリカのこんなイメーシを少し変えたかもしれない。ケニアのストリートチルドレンに密着したドキュメンタリー映画。たき火と空き缶でピラフを作り「ホテルの料理よりうまい」とはしゃぐ少年たちや粗末なバラックで子どもに勉強を教える母親の姿。写真に「同情や悲惨さでなく親しみを覚えたい」といった感想が多い。

国内ではここ数年、ルワンダの民族紛争を描いた「ホテル・ルワンダ」、タンザニアの漁村を舞台にグローバル化の暗部に焦点をあてた「ダーウィンの悪夢」など、社会問題を題材にした映画が相次ぎ話題になった。だが、ひと味違う日本人監督の映画が最近加わった。大宮直明さん(48)の「アババとヤーバ」は、スーダンの少年と文通する日本の老人を描き、戦時中の食糧事情など、近代日本の記憶との共通点を浮かび上がらせた。大宮さんは「同情でなく共感できる視座を持てば、何かが変わるのでは」と期待する。

アフリカ人監督による映画も手軽に撮れるデジタル機器の普及で増えつつある。ナイジェリアは今や世界有数の製作本数を誇り「ノリウッド」とも呼ばれる。まだ日本で目にする機会は乏しいが、現地の事情に詳しい「シネマアフリカ」代表の吉田未穂さんは「アフリカ人の目で見ると、アフリカや世界を見る視点は、本当の姿を知るのに役立つだろう」と語る。

(岩田誠司)